

教育学研究科

## 高見 茂 教授

1951年生まれ 奈良県出身  
京都大学経済学部 卒  
京都大学教育学研究科 修了  
専門：教育政策学



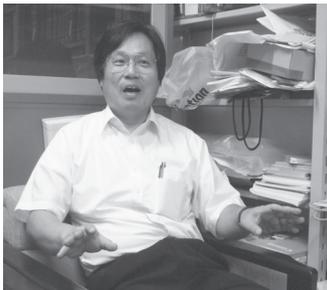
### 研究テーマ

「紋所が目に入らぬか」という時代じゃない。

みなさんも知っていると思いますが、国の財政は非常にピンチです。ですから、教育費の確保をどうするかというのがこれからの最大のテーマとなってくると思うんですよ。財政的にはますます厳しくなっていく一方だから、公財政ばかりで教育費の調達をするのは難しくなる。公平性・機会均等の問題にも十分配慮しながら、公財政で調達されている以外のところで、教育のための資金をどう集めることができるかということが今考えている研究テーマなんです。

そこで、今私が非常に注目しているものの一つがCSR（＝企業の社会的責任）なんです。例えばある企業が、一生懸命環境保全や社会的弱者の救済をしているとする。社会貢献を非常に熱心にやっている企業といえばイメージがいいですね。一般の投資家からすれば、そういう企業を助けてやろう、そこの株だったら買ってやろうという気になりますよね。そうすれば、その企業の株価は長期的に見たらやっぱり上がります。業績も長期的に見たらみんなから支援され、成長します。投資家が投資家としての社会責任投資をする。そうすることで積極的にCSRを果たす企業が成長する。このような好循環を作り上げるという発想が環境保護活動などではすでに見られます。これを教育面に応用できないかということを考えているんです。

教育に対して非常に積極的に支援をする、お金じゃなくてもコンピューターを送ったり、教材を出したり、教育に関する支援をしている企業に対して、その教育面の貢献をCSRの一環としてとらえられないかということを考えているわけです。このようにすれば間接的に資金やモノを教育界に引き込むことができると考えているんです。



教育に関する外部資金導入について熱く語る高見教授

企業は教育に対する積極的な支援をCSRとして社会的に認められれば、また積極的に教育の支援をしてくれる。こうして、税金ではもう賄えない部分を確保していける道が開かれるのではないかと考えています。これは、英国ではもうすでに始まっているんですよ。

企業としても高い税金を持っていかれることについてはあまり良く思わないでしょう。しかし、出したお金が教育に対して役立っているということがストレートに見えれば、嫌な気がしないですよ。

ないものを出せ、教育は権利だからと

言ったらダメですよ。いまだに教育界にはそこから一歩も二歩も出られない人たちがいるのが現状だと思います。寺で拝んでいればいい、「紋所が目に入らぬか」という時代じゃないということ。積極的にいろんなことを考えなくちゃいけない。私としては、企業をどのようにパートナーとしていくかを考えているんですね。企業っていうのは学校を出た人材を活用する。活用するのだったらそのための貢献をしてくれよ、というのが私の思いなんです。

### 学生時代

――挫折、挫折――

京大の経済学部生の時代は、公認会計士になりたいと思って勉強していたんですよ。けっこう頑張りました。けれども、結局自分の力では結局は無理でした。やはり悔しかったですね。そこから就職するか会計士の勉強を続けるか、非常に悩みました。

当時興味を持っていた銀行があって、そこに就職しようかと思ったのですが、公認会計士の勉強を就職してからも続けられるかということを疑問に思っていました。そこで、就職してから公認会計士の資格を得た方に話を聞かせてもらったんです。すると、勉強時間確保のために5年間ずっと睡眠時間が5時間だったということを聞いて、これは無理だと思いました。就職はあきらめて、しばらく受

はみだし  
すてーじ

本当に好きだから言わなきゃいけないサヨナラがある。  
⇒サヨナラ、僕の夏休み

(経・3 あっち)  
(また来年会えるよね；編)

勉強に没頭する生活を続けました。でも、いつまでもやってられない、だから結局途中で挫折ということになりました。万が一の時のために、教員免許は取っていたんです。会計士がダメだったら残された道は教職に就く、高等学校の先生になるという道しか残っていないと思っていましたから。当時、たまたまマスターを出たら、教職の1級（今の専修免許）をもらえるという話を聞いたんです。人よりも遅れて社会人としての人生を出発するわけですから、1級を取ろうと考えました。また、教育の現場へ行くという決心をしたからには、ちゃんと勉強して先生になろう。こう考えました。

そうして大学院に入ったんです。だから、特に何かを研究をしたいということではなかった。何をすればいいのか分からず、最初はエンジンがかかりませんでした。でもその当時の指導教官が辛抱強く指導してくれたんです。厳しく怒られもしましたけれどもね。

そして進路をどうするのか、と尋ねられた時に、ドクターまで行こうかという気に徐々になってきたというわけです。「せっかくだからドクターまで行きますか」、それぐらいの気持ちでした。でも、ドクターに入ってからではやるしかないと思って頑張りました。研究者を考えたのはそれからです。はじめは夢にも思っていませんでした。

大学院を出てからも相当苦労しました。5年、6年全く就職できなかった。非常勤で食いつなぐ毎日、ものすごくきつかった。

その後、奈良大学を経て、京大へ移ってきたんです。

▶学部生・院生・  
クター時代とそれ  
見教授 乱万丈の人生経  
験を語る高波



## 教授一問一答

おススメの一冊は？

新田次郎『<sup>いしぶみ</sup>聖職の碑』ですね。

休日は何をしていますか？

土いじりです。今年はスイカがたくさんできました。

「私の裏の顔」といえば？

農夫ですね。

もし過去に戻れるなら？

公認会計士試験に受かりたいですね。

アルコールは嗜みますか？

全くダメです。原因には「先祖の呪い」説と「大和朝廷の遺伝子」説があります。

「らいふすてーじ」は読んでいますか？

全く。これからは悔い改めます。

## ベンチャー設立

—「関西教育考学」—

教授は2004年に、ベンチャー企業「関西教育考学」を設立されましたが、どのような企業なのですか？

「関西教育考学」でやっていることについて基本的なものとしては、eラーニングのシステムの開発があります。また、大学の事務職員の研修講座の運営をしてその授業をオンラインで放映しています。大学の先生方の調査研究のお手伝いの下請けなんかもやっていますよ。アンケート調査のデータ処理とか発送とかね。それから修学旅行生のためのキャンパスツアーのお世話もやっています。

設立の理由は、オーバードクターの失業対策なんです。大学院を卒業してもなかなか就職できない。その就職できない人はどうするかというと、大抵は留年して大学にいます。しかし、職のない人間には大学の授業料の負担は困難です。でも、大学を辞めて無所属になってしま

うというのは、将来就職するのに不利になってしまうからやはり辞められない。そんな人を雇用するために設立しました。

また、技術はいいものを持っていても社会的になかなか認知してもらえない人が埋もれています。そういう人たちを仲間に加えることで、彼らの技術が生かせるわけです。そういった人に対するメリットもあるわけです。

## 京大の今・昔

今の学生はどうして学校に出てくるんですかね。

私が学生の頃は5月の連休が終わったら、食堂はガラガラでしたが今は違います。それが不思議ですね。食堂は新学期と同じ調子で満員、講義室も人が減らない。今の学生はどうして学校に出てくるんですかね（笑）。昔は自分で考えて自分で勉強していた学生が多かった記憶があります。

ちなみに、私は学生時代は5月以降も授業に出ていましたけれども。

## 京大生に一言

京大の学生は色々な面で恵まれている。

今の京大生には若いときに幅広く色々なことを体験してほしいですね。危険でないことをね。京大の学生は色々な面で恵まれていると思います。だから自分の周りの事柄が社会一般のスタンダードであると思ったら困ると思いますね。もともと能力資質はすごく高いんですから、自分たちの行いというものについては、その影響も含めて十分に配慮してほしいです。

それから、外国の実情を自分の目で確認する機会を持ってほしいと思います。長く時間をとって自由に見聞することは、学生のときしかできないと思いますからね。今や国際時代ですから、将来職に就いても外国との交流ということ抜きにしては務まらないはず。そういうことに対する経験を早い段階で積んでおいてほしいと思っています。

———ありがとうございます。

はみだし  
すてーじ

「君、フィギュアスケート好き？」「否！ パウアー」  
⇒アラカワシズカに、心をワシズカみにされましたね。

（農・4 ふったん）  
（スケートだけにすべる話；編）